資料9

日刊「赤旗」

東京のページ

足立16中の教諭名誉棄損裁判

都教組足立支部が声明

裁判・支援運動とはまったく無縁

子どもを真ん中に学校づくりに奮闘

東京都教職員組合足立支部（足教組）執行委員会は、足立第十六中学校の教諭の社会科授業にかかわる名誉棄損裁判とそれを支援する運動とはかかわりがないなどとする声明をだし、二十四日、区内の駅頭で声明文を配布しました。

同裁判は、足立十六中の教諭の社会科の授業を生徒の親（アメリカ国籍）が「反米的だ」と批判したのにたいし、この教諭が「反論」をプリントにして配り授業をおこなったことが、名誉棄損にあたるとして昨年十月に親から訴えられているもの。

この問題については右翼系紙誌などが、「教諭は共産党系の『全教』に所属しており、共産党の機関紙『しんぶん赤旗』を教材につかうなど偏向教育の札付き」（『大凧』11月号）などととりあげています。

足教組の声明は、この裁判とそれを支援する「平和教育を守る足立の会」の運動と足教組とはまったく無縁であると表明。この教諭は親から批判がだされたさい、親にたいする「反論」のプリントを配布して授業をおこなうことによって「生徒の前で一方的に親への批判をおこなう状況となり、多くの生徒をその『争い』に巻き込むことになりました」とのべ、この非はただちに改められるべきだとしています。

また声明は、この教諭から裁判闘争を支援要請があったさい、足教組がことわったことを明らかにし、その理由について、教諭がみずからの非を認めず改めもしなかったこと、教諭を支援することは、親の訴えにたいし教職員組合がたたかうことになるとのべています。

声明は、さらに時事問題などを教育活動でとり扱う場合、児童・生徒の発達段階に即し、学問研究の成果を踏まえ、さまざまな角度から、客観的事実を基礎に、児童・生徒自身の調査や自由な意見発表など自主的な活動を保障することを基本にとりくまれるべきだと表明。意見や価値観その内容を具体的に明らかにし、子ども自身の活動を通して考えることによって主権者にふさわしい現実政治にたいする理解力や公正な判断力、批判力を身につけることが可能になるとのべています。

声明は最後に、足教組が「子どもは学校の主人公であり、父母も教職員も教育の主体」であるとの立場から「子どもを真ん中に、笑顔輝く学校づくり」の実現のために奮闘していることを表明。子どもたちにとって生きるうえでたいへんな困難が横たわっているとき、父母・教職員が協力して子どもたちと向かいあう必要性をのべ、子どもたちの「もっと広くもっとのびのび、友達とともに成長できる道を保障してほしい」との願いが通じる教育実践のために父母、地域の人々と力を合わせていくことを表明しています。